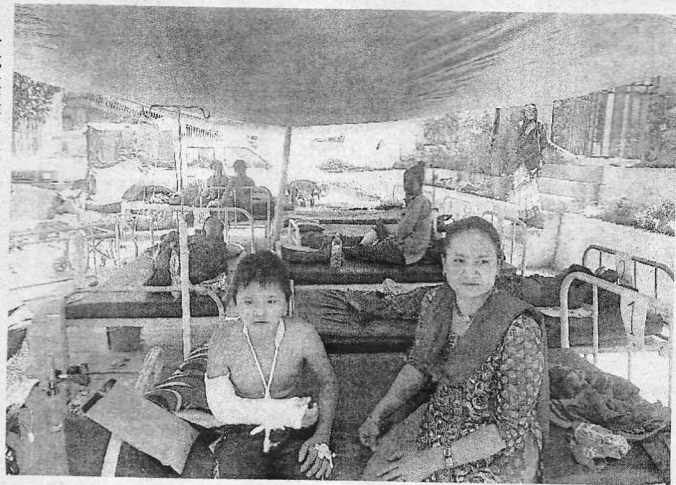


ネパール地震 支援の医師帰国

ネパール地震で医療支援に入った長崎大熱帯医学研究所教授で医師の山本太郎さん(51)が帰国し、9日に朝日新聞の取材に応じた。「山間部では被害の状況がよくわかっていない。今後は衛生面の支援が必要だ」と訴えた。



山本さんは国際医療NGO「AMDA」(本部・岡山市)と長崎大による共同派遣で5月1〜4日、首都カトマンズから北東へ100キロ弱離れたカディチョウルという地区に赴いた。病院も被災しており、中庭に張った布の下にベッド約10床を置いた仮設診療所で活動した。夜は診療所の空いたベッドで眠った。

診療にあたったメンバーは計約10人。山間部から人が自力で歩いたり、担架に乗せられたりしてやって来た。切り傷や骨折が多かった。診療所で出産した女性もいた。当初は1日約70人が受診したが、徐々に減っていったという。

山本さんは「けがの手当てなどの初期対応は終わった印象だ。これからは雨期に備えて衛生面や感染症の対策が重要になる。3カ月や半年といった長期的な支援が求められている」と話した。

「衛生面の長期的な支援必要」

仮設診療所で治療を受けた人たち
||長崎大教授の山本太郎さん撮影